

「驟雨」
しゅうう

岸田國士
くに お

人物

朋子
ともこ

譲
ゆずる

恒子
つねこ

家政婦

時 六月の午後

所 洋風の客間を兼ねた書齋

朋子が割烹着を脱ぎながら、慌ただしくはいって来る。その後から、家政婦が、何か云ひたそうにしてついて来る。

朋子 そうよ、あれはあれでいいの。(割烹着を家政婦に渡し、机の前に坐る)あと、ハンケチだけでしよう。暇を見て、しといて頂戴。こがさないようにね。あ、それから……その前に一寸お使いに行つて来てくれない。その八百屋に苺が出てるかどうか見て、もし、出てくも良いのがなかつたら、駅の前まで行つてね。上等のを一箱取つて来て……。

家政婦 おいくらぐらゐのを……。

朋子 いくらでもいゝとよ、良いのでさへあれや……。

(ペンを取り上げ、抽斗をさがしながら)あたし一寸、はがき端書を書くから、それもついでに入れて来るのよ。さ、支度をして頂戴。(端書を書く)え、と……。

家政婦去る。長い間ま

朋子 あ、芳沢さん……、今朝来た端書を此処へ一寸じちいせ……。状差に差してあるでしょう、絵端書よ。

家政婦 (端書を持って来る)「これで御座いますか。」

朋子 (見ずに受け取り)「え、それ……。 (見て)「これぢやないの。今朝来たのがあるでしょう。(笑ひながら)いやね、これは……。 (家政婦、これも笑ひながら去る)海岸の写真よ、蒲郡つて書いてある……」

家政婦、絵葉書を見ながら現る。

朋子 (引つたくるやうに)「どら……。え、これよ。」

(間)——「二人とも、大層気に入り、四、五日逗留の予定……。」か。

家政婦 は？

朋子 「こつちのこと……。早く支度して頂戴。」

家政婦去る。

朋子 (書きながら)「……。それでは、今のうちゆつくり遊んでお置きなさい。旦那様によろしく……。」と。芳沢さん、さ、これを持って……。まだなの、支度は……。？あ、そうそう、お風呂を見といてね、行く前に……。もうお帰りになる時分だから……。

家政婦 (奥から)「もうちやんと沸いてをります。」

朋子 そう。(間)そいぢや、なにしてるの、あんだ。

家政婦 一寸帯をし直してをりますんです。

朋子 帯なんか、いぢやないの、いちいち……。すぐそこなんだもの……。

玄関の戸が開く音、朋子出て行く。間。――

讓、現れる。機械的に机の上の絵葉書を取り上げ、それを読む。

朋子 (続いて現れる)すぐお風呂になさいます？

讓、返事をしない。そのまま、奥に去る。

朋子、やゝ暗い表情。ぐったりして椅子による。が、すぐに気を取り直して立ち上る。

讓の声 おい。

朋子、黙って奥にはひる。

長い間。

玄関で「御免なさい」といふ女の声。続いて、朋子の「あら……」「といふさも意外らしい叫び声。

朋子の声 どうしたの……。どうして帰って来たの。ひとり？(間)今朝見たわ。(間)え、四、五日逗留するつていふから、まだなかなかだと思つてたのに……。
(間)そう、まあお上んなさいよ。(間)うちぢや今帰つたよ。(間)いよのよ、そんなよ……。

朋子、続いて恒子現る。——恒子は、やゝ疲れてゐるらしい。

朋子 どうかしたんぢやない。いやね、笑つてばかりゐて……。

恒子 (腰かけながら)まあ、一寸休まして頂戴、今着いたところなの。

朋子 そいで……？

恒子 あの人？(意味ありげな微笑)今云ふから待つて。(溜息)ほんとにお邪魔ぢやなくて……。

朋子 (訝かしげに)いや、あたし。そんなに笑つてばかりぢや……。つねぢやん……。

恒子 せつかちね、姉さまは……。

こう云ふと、急に、姉の視線を避け、ハンケチを取り出す。眼に涙が溜つてゐる。それが、われながら可笑しいといふ風に、また笑おうとするが、もう我慢がでない。ハンケチを眼にあてると、いきなり肩をゆすつて泣く。

朋子 (途方に暮れて)可笑しなひとね……。どうしたつていふの。(妹の肩に手をかける)

恒子 ……。

朋子 泣いてたんぢや分らないぢやないの。あの人があどわかしたの。早くおつしやいよ。

恒子 御免なさい。姉さまの顔を見たら、つい悲しくなつたの。(間)あだし、よっぽど黙つてようかと思つたの。黙つて、辛抱しようかと思つたの……。だけど、もう駄目……。あんまりなんですもの……。あだし、あだし、うちへ帰るわ。(間)どうしても、いやなの。

朋子 どういやなの。

恒子 どうつて……。何もかも。

長い沈黙。

姉は、うなだれた妹の横顔を、まじまじと見入ってる。

朋子 喧嘩したんでしょう。

恒子 いえ、そんなとぢやないの。(間)やっぱり、いけなかつたわ。

朋子 やっぱりいけないって……前から何か……。

恒子 そうぢやないけど、そら、行儀が悪いって云ってたでしょう。

朋子 そんなこと……？

恒子 そればかりぢやないの。え、つまりそうだけど、それが、ただ行儀が悪いんぢやないの、あたし、つくづく愛想がつきたわ。

朋子 男つてみんなそうよ。

恒子 そら、何時かうちへ来た時、母さまの前で欠伸をしたつて、母さまがあとで怒つてたでしょう。あ、いふことが、のべつ幕なしなの。それや、欠伸なんか、あたしの

前でしたってなんとも思やしないけど、他人（ひと）がゐる時に、そばではらはらするようなことを平気でするのよ。

朋子 どんなこと……。

恒子 いちいち云へないの、あんまりいろんなこと……。：。汽車へ乗ってからだつてそうだわ。いきなり、腰掛の上へ脚をのつけて、ぐうぐう眠るのよ。それが、発つた日からそうよ。

朋子 話もしないで……？

恒子 話なんかするもんですか。まるで何の為に旅行するんだかわかりやしないわ。みんなが変な顔して見てるの。そうでしょう、ハンケチもかけないで、口をあいて眠ってるんですもの。

朋子 （笑ひをこらへて）式やなんかで草臥くたびれたんだわ。

恒子 そいぢや、あたしはどう……。久しぶりで、あんな帯を締めてさ。

朋子 あなたは違ふわよ、女ぢやないの。

恒子 もう、姉さまも、そついふことを云ふようになつてらつしやるのね。

朋子 ……。

恒子 それから宿屋についてからでも、女中なんかにはかり話しかけて——冗談を云つたり……それや変なの。御飯をたべる時なんて、あたし、お給仕してる女中に恥かしくつて……。だつて、云ふことが下司げすなの、——

——ネエさん、東京だろう。どうも田舎かたの女にしちや、様子がイキだと思つた——かうなの。女中の云ふことがいゝわ。——旦那も東京ですか——だつて。さうすると、変な手つきをして頭を搔くの。——いや、逆襲は恐れ入るなあ——つて。どうでせう、いやね。

朋子 恒ちゃんも六ヶ敷むつかしいわね。さついふことを云ふもんよ、男つて……相手次第ではね。

恒子 兄さまもおつしやつて……？

朋子 えゝ……さあ、兄さまはどうだか……。

恒子 おつしやらないわよ。それからもつとひどいことが
あるの。昨夜なの、それは……。——蒲郡つて、何県？
つて訊いたら——何県だと思ふつて聞きかへすの。姉さ
ま知つてらつしやる？ 知らないわねえ。だから、いい
加減に三重県？ つて、ただ云つてみたの。さうした
ら、笑ひながら、——そいぢや、どの辺にあるか、日本
の地図を書いて、円をつけて見ろつて云ふの。あたし、
そんな女学校の試験みたいなこと、いやだつて云つてや
つたの。さうしたら、紙と鉛筆とを出して、どうしても
書けつてきかないの。しまひに、日本地図も書けないの
かつて、それや、しつこく云ふの。だから、あんまり癪
でせう。日本の地図ぐらゐ書けますわつて、そら、よく
書いたわね、あの通り書いてやつたの。さうすると、本
州だけしか書かないうちに、——なんだ、それや胡瓜きゅうり
かつて……（笑ひながら泣き出す）

朋子 え？

恒子 胡瓜かつて云つたわよ(また泣く)

朋子 (腹立たしさと、可笑さを制しながら)随分、失礼ね。

◆本テキストは、インターネット上の「青空文庫」のテキストから抜粋し、一部加工したものです。